

みなさんの多くは、大学ではじめて母語と異なる言語、つまり「異言語」とまともに向き合うことになると思います。大学より前の教育課程では英語のみを学んできた人が大部分だと思いますが、多くの場合、その学習は受験という目的に向かって突き進む、単線的なものであったはずです。言語学習一般から見ると、その学習経験は、非常に特異で限定されたものです。これからは、その経験にとられることなく、さまざまな試行錯誤を繰り返すことを厭わずに学習をすすめるという態度が不可欠になります。なぜなら、大学での言語の授業とは一里塚のようなものであり、一里塚をたどっていけば一定の目標が達成されるように配慮されていますが、一里塚と一里塚の間は自分の足で歩くことを求められるからです。一里塚と一里塚の間に道は無数にあり、正しい道が決まっているわけではありません。一里塚と一里塚の間で迷ったり、どんどん先の一里塚を提示されて、ついていくことを断念してしまう人もいます。迷ったり遅れたりした時に、一緒に歩いている仲間にあずねたり、地図とコンパスを見て確認したり、教員に助力を仰ぐという行動をとることができる必要があります。だまっけていても誰も手を引いてはくれません。主体的に道を探し、それを自らの足で歩いてみる必要があります。

受験英語の学習と大学での言語学習との根本的な違いは、その目的設定にあります。受験のための英語学習は合格のためという目的が明確であり、そのため重要なポイントも所与のもので（試験にでるところが重要）。ところが、大学での言語学習は、あらかじめ与えられた目的があるわけではなく、目的の設定から学習者が行わなければなりません。そのため、重要なポイントも決まっていません。なにが重要かということは、目的によって変化するからです。とりわけ言語のような、あらゆる局面で用いることができる一種の万能道具という側面を持つのであれば、なおさらです。もちろん、スペイン語習得一般において重要な点はほぼ決まっており、学習開始当初はみなさんにとってもそれが重要となります。しかし、学習が進むにつれて、一般的に重要なポイントと「あなた」にとって重要なポイントの間にズレが生じることは十分にあり得ることであります。

「目的は学習者が決めるということなら、学ばないという選択肢もあるのではないか」と思われるかも知れません。たしかにスペイン語以外の言語を選ぶ自由はありますが、初修外国語を学ばないという選択肢はありません。それは京都大学が目指す教育には欠かせないものと位置づけられているからです。もう少し具体的に言えば、京都大学で学ぶ者は、多極の世界観を身につけることを要求されており、そのためには英語以外の言語を学ぶことが不可欠と考えられているからです。

ちなみに、大学での1単位というのは、45時間の学修によって構成される内容と定められています。一般的には、90分授業を15回行いますので、時間にすれば22.5時間となります。つまり、授業だけでは想定されている学修時間の半分にしかならず、残りの半分は授業外で行う必要があるということです。もちろんこれは標準的かつ最低限の想定であり、学習者個人が自らの状況を判断して学習時間を増減させることが必要です。

あたらしい言語を学び、それを通じて得られる新しい経験は、非常に魅力的なものです。上に述べたことは、スペイン語独特の魅力をよりよく味わうために必要なことなのです。厳しく響くかもしれませんが、それだけの見返りはあると思います。

なお、平成28年度より、中級履修のための条件が「スペイン語IB（文法）の単位を修得していること」と変更になります。全学共通科目履修の手引きの「外国語の履修について」の該当頁をよく読んでください。また、会話コースは特殊な形態ですので、欠席の扱いが他コースとは異なります。シラバスを熟読してください。

◆全回生対象（初級） ※再履修者クラスを含む

スペイン語 I A・B（文法）	Primary Spanish A・B
スペイン語 I A・B（演習）	Spoken Spanish A・B
スペイン語 I A・B（会話）	Oral Spanish A・B

◆2回生以上対象（中級）

スペイン語 II A・B	Intermediate Spanish II A・B
スペイン語 II A・B（実習）	Spoken Spanish II A・B